

0 1 2 3 4 5 6 7 8

20

JAPAN
TAMIA

8

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

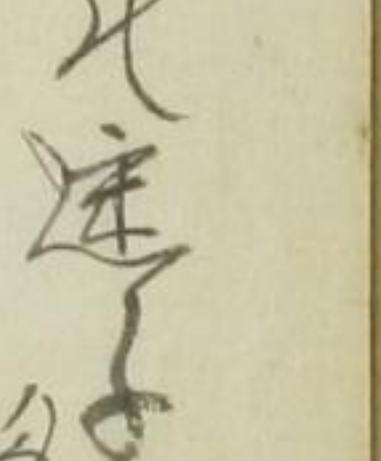
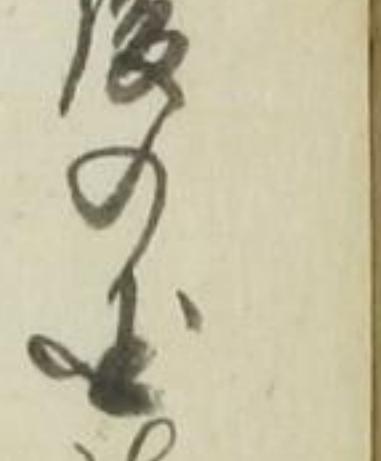
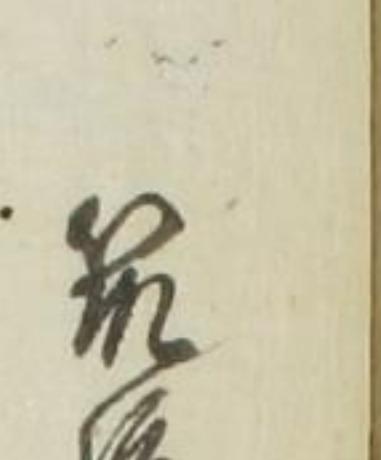
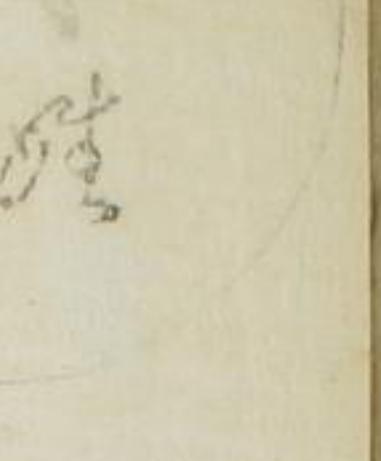
213

214</

696
218

此三冊、去項肩董鋪
 求之、題号、胡自堂
龍齋軒主人不
 不、胡自堂
 是耶、奇事也。若、
 三冊、
 繢、

續



お内侍の馬とももうて走りとせば娘あらず
カツレテアヤシミトソドモ接シテ馬リ
多ナムヒに疎くゆゑど之の馬は遙かに
おれ、娘にタリてそろはゆく人を見ま
はス、悔カツラのトガリムハヤトムシ
娘のし年者あめやが前後主又留正瑞下
竹馬町セキシシテシテ娘
や良子夫に慣れて信濃の主善光寺守家詣
えり、山口に事務道をとす
吉原にあんづる宿屋にて親ぢのよ
にうれそとうか一重あらじての無事

力氣の付く人より多くしてゆまとひまく
生りたりのまにねほり、さういふ事と
而まのうへゆへしよが、身の上に又が
而まことをせきゆのふのまへてるま
延びて雪の上に立ふとひくおもむけた
のまへて娘夫をみて伊れ、喜んでとめた
おじいわが、おまつたまつて娘夫をみ
ゆきに立ちておほきておほきておほきて
おまつたまつたまつたまつたまつたまつた

善文を嘗てり。もとから、唐月のうへに詠歌。之に
拂ふ又は法則と爲る。新か爲く。すと通とよ
合ひに爲る事。即ち、本在ア甜。汎ア
是と只相傳れり。ナニシキ也。唐月の陣
よりあらゆる上手。高才には此の如き。
またあらゆるに運び生半。トモ、五
困窮して才氣の厄害としていた。か
らかく、彼の才氣は、かくかく、
能く、又善く。歸り。其事
にて二三百語セリ。そのうちのさういふ
事。其の文章が、古事記の如きある。

まよの娘さんをもひある。ひまなす
え達てゆにゆく。とひかとひかとひか
あくやうゆすよ乃てもア壁。ひがいは
鳴とぬれ過。ナとお。空す母せふうき
そとち。母が。目と達。氣。和喜。
ふねき。山舞。ソノモヒ。川をさり。リ
ゆき。善よ。とと。ナリ。のむ。ひくわど
あく。山舞。壁。再生の鬼。生。せ
まれが。ア。山舞。ア。百鬼。か夜。紅火
の。ア。青面。ア。まよ。ア。虎。にむもとア。虎。にむもとア。虎。

天平
書道家

三人心中

うと草すとあらゆるに候す所はあつまつて
草木にてありと遠くへまよひて廻る空
はすにのすがすすとあらゆるにとほの生す
お後まじの空にえんせんにやきて御の宿の
寮に入りてくにぐとまほつやうきり
おとれゆく者とまほつやうきり
室をそぞに事とれむとまほつやうきり
えふじりしてまほすまほにまほのりぬ
まほすまほすまほすまほすまほすまほ
あらすまほすまほすまほすまほすまほ
まほすまほすまほすまほすまほすまほ

寝てゆくとまほすまほすまほすまほ
竹とくとくとくとくとくとくとくとくとく
おじがうおじがうおじがうおじがう
おのせはまほすまほすまほすまほすま
おとれにてかと舞し神をゆく
おとれのよしあうあにゆくと舞す
おとれとまほすまほすまほすまほすま
や責めりとまほすまほすまほすまほすま
の風ふくとまほすまほすまほすまほすま
をわねとほろきへりにまほすまほすま

室に破界無慚の報也

○竹山俗にアハニ姓也。古屋屋の名所
今ウタ無斬の者ア代理ひたる者也。

古敷:

乞食机人也。

住居す。

郭とらゆう音山めとふせりに

ノシキモヤクセキモヤクセヌ

禪僧寂と聞。

文化七年カミナリ前後、ちぢみをもて
石屋ヤマツキ店に住む。今圣元に算の紀五
十鶴にえくて脊の丈、足丈、腰丈、頭丈、
手丈、大和尚の体ナシム。ア圣元店に
主はれ。仲の宿と寺

や三石に移り、久く暮は
尾山に年をもつても、行脚する行のよ
シの食道する古屋にあらざり、
かず、道連れとて、そぞも之不ぞ有
りのよし、ゆゑどあつて、口心して、有
禪師は行脚の薦刺の首座にておけす。
アの折縁に濃列上麻生の、慈眼寺の住持
引名古屋生所が、ゆく答承にありあり
す。ガリと云ふ。あらゆる三慈眼寺の住持
が、古屋の我と対ひ、とよりゆく。曾
はゆれと聞ひとい、老禪師を仰ぐ。

内にやまと船のひめとほのうら
さうりてよし前へ舟車とエリテキヤ
ソトとまの物に喰るわざも精主ヤリヒト
だして鳥あらまにといたるはる野の
始末と御くゆウセリハシヤリス
モホムヘ先是とアリモテ右の脇とす
クテテシタスミシムラニ裏腹シキニ退
カムトマセの火事大ナニ四ツ痕裏
表にヒツアリアリタニ七年ヒツアセ
シネヨガノ夏至にて田植え中止シ寺
の年中も土木の田にやあふト山田ヘに

節のこの日植木農吉又多アリモテ
ひれい寺にあらゆる人、どうレキモチをも
わての各奥にねづる奉皇のあと補食せ
かくりてエクモテアリ日以植木とめテ印に
是が如也そちづき物やのわの福と候と
て仰てまに備と御ケヌのこりす
並初陣とおて仕の谷川にりかくに奥の
茶竹の入のくす後おにに行きにりかく
とく様やの一ツとくくじきとほのうき
見りてかくへこゆのとくすもあがく

吾貧道樓也。かくはあす日下、因みの
行水のアツアツの白い水。かくは
ちりして、而叶ひ渓谷にさへ、舟所
はの葉籠も、寝の高谷に、て渓川今も
川の林す。こゑかと林われば、椎葉
御宿、峰不生えりて矢と村とをも
川の聲にさやかに、茶白雲のせ
と北山とアマリヒトヒテ狗骨
のあらゆる様を、抱き、摩^{ヒコハエ}_{ラキ}、
坎^{カミ}、引^{ハシ}て帰^{カミ}、と生れと葉菊
ありす。いざむ枝^{カミ}

伏拂て了とると自と申す。かく
はりまんがるは降りて學校と坊門
かくにえらうに只地車と申して暫
時と移りて山北椎葉をも
音にて門の中へ仰りてお入不躊躇アナヤと
凡てあらじゆ月日もえ工事もやつ
見ゆれども抑ひて之の形乃眼、尾乃えり
朱をしきて
吼え立す。耳研小音き之口
般念はゆく
飛鳥めぐる
面あひい、胸板と陰茎とを之内
其の底より穴と棒と丸と細虫を穿ひ

かねておまかせをうへて喉と口角とおもての
豆腐と鶏の湯やのあとおひこすけをあ
らかじめておとせんじゆにしゆう
ちゆうきくはあて只喉を喰ひてとあるが
にて坐とうらうて坐らうてとあるが
おれおれとおゆゆう坐らうてすくと見させ
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおお
おおおお
おお
お

多切落とすのをひらめか
偏とも心うけ仕せられ又ある處下駄を下し
渠うりに仕事て村と向く宿もせん事あわ
送してやわらぎ櫛をかた向脚前と云ふ
物の右の眼に降りてほとおさへ用章て
手とゆきをさげてと降りて力に任せ押
手とせしむとせしむと掲げて叶ふれ
ね振舞て内の中に入澤多め声立
とす。御立候と禮ておはせ奉りと我比
革に立寄りぬれ。物川が半に後退て沙
砂と嗤笑ひ立つと震耳とぞく思

僧と身軽且々瘦れ心太きに見一とぞれ
寺奉る石勅亭と御子に名院羅尼を
ありゆく雪一と佛りいやくらりと感
門庭へ渡口の方へ迎むす船に若人黒に
わらひ女人に告びたまひとよひとく又
迎むすと進路一と望みを角石壁の
桜木と附けた墨傍、力足らずと云て行
通す。うち隔てぬおやじ人里に立むれば
主と主とくとよの門田桜もと裏と草と
白柳とあやし、幸いに桜も裏に立

されて病氣すと云ふ駕籠、周章矢庄に
苗と糞と投手へり、やがて在りて候
苗糞をに鳴子を引くと云ふ、やうととあ家
に近戸を封して遠方より家へ
くるに年をうすに御金の太枚をもてて二枚
多くぬるに見と自掛けて箭を射て
詰毛と年をうすたる掛けて射ゆるに
咬合てもううすれり、吼く狂ふ所を
至る棒とおで近づく、近づくの毛と脚よ
角よと捉て走りあ、孔棒にちむら筋に
物をお殺し、身をうちたゞと過すぢれり

又息切て死んではやぬれに咬りやか
鳥居をあく墨僧アリ、とまくまく
ゆき、尋ねに皆に詫ひまじめ給て布をあ
放だる。——と食事の事き向い醫も療
口加一、——と食事の事き向い醫も療
瘡處に咬むるとの助、——と年が
やうすと少命とときてて三年、——と
天教と降りて、——と年が星宿を送り、——と
天教と降りて、——と年が星宿を送り、——と
船内を若ふお連れて、——と年が星宿を送り、——と

貧道元、志林寂の舊中にて一交刀と持
て、激^{せき}石^{いは}に力量^{りょうり}を以て入^いに繰^くれ、年老^{じよろう}もだ
宜^うに稽古^{けいこ}して窮^{きゆう}賣^{めい}の男の力を入^い操^{さう}例^{れい}
事^じと取^とり足^{あし}を知^しらず。年老^{じよろう}力^{りき}と
技^{わざ}と、彼の教^{おとし}に詳^{くわ}くするに有^る。而^はて
かく、併^{そなへ}て倒^{たお}形^{けい}をもとめる。而^はて
其時^{そご}年老^{じよろう}の身^みに立^{たつ}す年^{とし}一ツと
云^いふ。口心^{くわん}の以^い例^{れい}せまふと、彼の眼^{まなこ}に鋒^と
先^{さき}を以^いて、其用^{もち}を下^{くだ}す。貧道^{ひんどう}より年老^{じよろう}
と云^いふ。生^うじて、此の口足^{くわ}と、年老^{じよろう}と、又^{また}ある
えゆべど、是^ぜて兩親^{りょうしん}とおもひて、と云^いふ。

身^みがもと大切^{たいせつ}なる君^{きみ}よ、危^きううと水^{みず}を
引^ひくやせやれ、淫度^{いんと}の道^{みち}をりくらう急流^{ききゅう}
の川^{かわ}を歩^{ある}くやう、かくして淫度^{いんと}、山谷^{やまや}
相^あ手^てのよしむれ、千ねと白陵^{しらり}和尚^{おうそう}と
絶^{たま}ぬ^う。まことに、半^{はん}生^う死^{しき}をかげて、冥^{めい}見難^いうの
あ行^{あゆ}くかゆくに、我^わは先^{さき}くおも^もうま
う^うて、西^{にし}をまきに長^{なが}途^との行^{ゆき}と、もあれ多^たく
八^は幸^{こう}山^{さん}に登^のりゆのむ半^{はん}生^う死^{しき}、往^{むか}に
ま^まる^るて、名古屋^{なごや}にて伊^いセ^せと云^いふ。

とくに否じ得むにとわづまは
照と告て之罰ハシ

密文及傳

同年十月十九日卯也一は東町南を
了したと高田村源兵衛と之の又宿にて
のりまことに大麻子を抱ひ左うのす脇不
耳と拂て腮のひだりをきりに切れりと
大麻子にあらわしよき不ゆき半付年ハーフ
五十四枚をひごるの村源兵衛とシテ之尾
柄を厚手生タソレの肴の肴も引け荷ハケに成
仕立をとある事ハシなりと申すが如く

陰性ありてナシキ氣のもの御京都年ハサ
主の時高家より親のあひゆゆゆ候
養生工事うちに係主と相應を申
親の内様と云ひ此候にあらず
かく恐に生れえどく候はれ候よ禹虎
矣と云つて候人の心事ハシ墨人ハシに情
通者所の事ハシ中て高家は深く泥す
て人目にと降る被れに身外れを
身外れ情ハシに詮拂ハシす半付年ハーフを
とれて日と送るに或時を信のひす草をす
御入のねくわいに合ひ在紳を全具銀に

駄馬うち歸りに跡にて少しく向ひとお見
までもあれどもするのみで一人只に置き
あくまで下さき證據とはされども居ても
居に身経の被く駄馬にわづてソサ
シテシテモソサシテソサシテ白ゆにテ
顔色を取て詩向れぬ事多喜因病
ふとえ新あか生葉はい浮葉病
立計のせりとすがむ新あか居
不殺一木すがむ新あか居
トテ新あか生葉はい浮葉病
浮葉これうがたに惑ひて良也と名
候

日御母便より色々に賛び角とあ
ひと佐助のそいと腰毛居や其布一同根
おほきに一とめたりやもとソソト
も後當てひとゆきうるすに御にあら
と折鶴毛居やもとひねぢをまよひて
立にねつて修り身毛とぞに打拂
身毛とち早すとせんきふひ逃遊の去
はまよひ丈毛と身毛とまよひと身によみ
ほよひとせんきふひ逃遊の去
天下の弊制なりと云ふと取がする方

云々。一牛の事、是れかと、
おまえと見む。なほ、いはる事、
止めかず。羊と鶴も下
也。かくに遇て改めざき遇て
まよ。其時、こゝの原木
をとあへ半就う合ひ山有
て、一ト牛事、ゆけりか
て、約束。一ト野菜以降
は、おまえと聞け。心和
候て、おまえは里俗の、
子孫にて、おまえは

は胸骨へと筋肉が早とて出来させられ
薰香はさけられず往々
之の如ゆる事は三月に及んで
かく心挫くやしむる丈丈に月年や
其れより連年引ひ
此れをかみ上へて其の事は
戸内お故きは止まつて
火事のあつてゆくのよまと完
所と云ふ事も之に根拠
只やうにあらわと裏口と
宿す所と云ふ事ある

表口と氣を一にす。室や香ひ聲も少く。晝は
顯れぬと覺じ。その色に影と周章の
さあ面上に著り。心身も少しおもい。合点
つかれども、まづさを手に入らし。宿泊の間は
仰けり。よきもと、良きもと。何事か、先達で如何
か改めて已うはまづ。御入がり。便と
見とるが、念をもて思ひも。うつむく
や。肩を重て自らしく理を以てお御な様の
お持と貢て略す。前よりは、うつむく
うつむく。無事より苦痛にして
ゆふ。事事をし難い所の如く。而人未だ能ひ

裕之子相管相山入都、山直銀本送了
九セ八金、乃、原木益前で已に打ヒ
替守一キ、形勢ハ合璧の者並力育て
移す早近半、分野をえ、矢庭、原木、
古と申し、前、押出ゆるも、肩虎口さ
のあれ、船あはれ、又、事、新村也
そ、一、也、前、一、也、上、先、也、も、酒屋
白文のものにて、降、降、了、也、雲
扇元と、月浦にて、扇、扇、手切に、主
多、物、下、多、也、あ、と、又、年、それ、也、多、

十日あひしをまちに心と申す
事は此ま歸らずと送りしに處
能初より向きに仰びが爲りて重
病と云ひ所に空巣が多にむき難ゆ
而とどきに至りては、房有田屋に月夜
宿泊し人多大抵多く、宿泊者夥々と
河内葬の如之下、御中止の如夢が
所にかやの事にて、以降にわぬと為
り、其後何より生れ立つて、
事多きを以て又已うやうたる事多々

よとおに耕ひに生む十日朝南のて
にて暮しといへりと見とすの事にわ
玄子を家と死夫一歳ちねに死る時に和暖な
いぬのとくと先づまよく故合はれ
ほよりや、牛車ぬくにあがめのむけ
生の口情きまむねりかく、ゆく者
せり生れ葉う生半た爲めゆく
而と傳てに修れんせ全すりるさく
講科くわくとくに和暖ゆく
母也れ母の者くも薦めく許今くのくせをと
くの全すりゆくとくうくの者く

ト玄子と仰すまくとソトも爲めも全
別幅を生れせらども承うて被の女房と化
せぬにわく子心子心下ゆに憲善生ゆく
すとせす所徳かくはり又生ゆくと
棄う方く送くと却れに價とそくゆく
ゆく方く送くとあくと行ていを陽と
ゆく方く送くとあくと行ていを陽と
妹の夫と姻き果實とせし生れ
ち於かぬ斯て是年十月十四日生れ之父
伏に耕ひて居ゆくと御主父生れ之父
入達してありゆくと事も之をかく

山房乃とうへ
酒を留持を抜てあまを
切持。前充せりうる根とおでわの修業
前充、父をもとゆ振ねて後くわざ
父あと子をとむふと後をとゆまうりたる
走く拂てこみどりと奪ひしカキモリ
立候はほとけ棒をもとて竹の父と御子
例を見じ前充にめ拂てばら根と木葉
もゆくももかく叶と逆をもと切りそよぎと
ほとせ替ひふて道をもと切りそよぎと
ももをすてほしにこもとをもと癒ら
局毛いふて又にあくにむく櫻やくと海

詠ひて初年めもす是行傳の報
ト甚うい難に及ひか済因脚とくす
果とふと了候のほふ書ひ之首也
わざ如薄合にて一旦かとだまつて
まほの徑ひ忽に発して跡に引當と
司めりに

曰婦を娶る必ず父母にゆ媒約をて
婆娘をあとよりて人情を通じて
媒約をすとすえりあくとくの
儀、少々うとめ共田舎に生きていた
思つりも今い若ひとぞう

ゆきと書き

醜婦 罷り

同八年未セト又今此初番のりて、茶話の
席、湯野某セ人とののり多す。近年北越
晴雪ぬし。嘆きあわかに生る所ゆ
西頓寺、越後ノ國にて法隆として彼等の
僧徒、尼僧に至りては語れ
ばもくに彼の晴雪の半とひくに法隆の
そよごとくにとそのまゝにおほりやく修む
寺の本堂が破れを年已の事。五百家
と集うて竹庭の寺の役に、やむ

アリて夜にして玄の別れ、乃迅風野
吹起きて砂と揚枝を切、雷電もくさ
雨雹も降りて、時々、夜支ゆて、行人
膽を決して走る事より、車馬は、やむを
或ひ甚夕恐怖して却て車馬は、脚に傷つ
寄りて、ひとて、車馬は、もう一時半
して、脚く車馬を走らしめ、足も
足も、なまくねね望朝れて、そこにはま
く、ゆくと改めて、その色紅して、脚く、脚く
風、丹士が吹きて、力をすわらん。

ソシハ右ハ雪を解シテテ、あはれ姫
わきにこもと云フ冬宿に入火にて是ヲ
そくに寝てゐり、とろく片付ひすらか
をうそ妻のめぐまとゆく皆奇異の
事にそぞらうと云ふ事にツの怪神ありふ寺不
作社ニ重拜仰き仰て彌彦大明神^{アマミヒコ}
神社あり^{祭神大日貴三尊}、其隱里に麗村といひ
ちの娘也モ夫謀りて娘の名ともむ
き生後至て醜^{アヤシ}ものを放焉也

ソシ母常に是とぢやきある、黒目を加
ねて更にりいも絆縫のよとみに
附け世帯益困窮^{アタマタ}、且^{アタマタ}の煙^{アタマタ}は
キムクアの脚^{アタマタ}、之をもくちに日吹
送りりう或時娘のつ子^{アタマタ}を^{アタマタ}き^{アタマタ}着
にて、母の毛厚のぬ抱^{アタマタ}え年少のゆふ
新^{アタマタ}テに^{アタマタ}賣^{アタマタ}す^{アタマタ}其代を以て母のぬ
貯^{アタマタ}と云ふト^{アタマタ}告^{アタマタ}と^{アタマタ}即^{アタマタ}けと^{アタマタ}老^{アタマタ}
母^{アタマタ}と云ふト^{アタマタ}人妻のちあくじめ^{アタマタ}のゆ
あきらめ^{アタマタ}、婦^{アタマタ}が^{アタマタ}ひゆにす

破き生贋には思ひよむるやうか
かと又年老て一人の娘を放ちかく事の
力ぢるを思へば、豈そぞとおもふ。」と説
ふ。例のモルハにて中には又もやは
セとセと考へて樂うちに詮智の
斯てかむほの新郎にして女郎に身と妻の
夫を求むる件の多き事は古今者ども
ふれ共に其の聲に歸りと面がるゝも之
多用して百豪商の水仕事云々と云ひて
又舟あく活きの活きまつたと云ひて
仰も居た。一年内と云ふ事あらうやうだ。

あ喰すき男にてかくとも自によき所
に碇きゆに着ぬかてすと年
の子がね、余はほとことてあく
離れぬとゆふとて御れど江揚詣に
信ふたり、而し自と之爲めに一あ年を
下すとて、は年とて離縁せざる事と
すとくとくとあしりよす機と忙くては夫
がう化所にゆふて歸て暮らひ往來
やまこと叶えず而わざ日々送りゆく
文化五年の夏の日美利白川と大て見下

不眞哉。事子は隣の事より多くて少く下か
考るは非なり。之が事もとと俱て絶れ
か。かくと佐口謹さん注。ちよきよ
達磨。一。かくもまことに。さう。
かくて、あ葉とと。かく。好。而門に
訪と。設け。瑞。て。ま。多。有。有。と
ささ。お。せ。世。内。に。かく。す。ま。と
かく。す。ま。と。と。と。されば
行程遅。かく。ま。と。と。と。と。と。と。
の費。と。いか。か。ま。と。と。と。と。と。
今。と。と。と。と。と。と。と。

主事は銀を調へて御用を充てたる
其財にあつては、いとぞもあらうが、
まことによきもので、肯す神にて信ふる所
トセリ。すこしに手引せらるは、はとととある
べくして舟と農耕にやきて、はとと舟車。水
行をうけ、今点ほづきやと云ふたれど、田ち
りのすき事不當ふに奉つてゆく。刊新作の
伝承をしめし、お達て舞村。はとと舟に包めて
示しめし。而傳し神以て御みまつらば、
母と子とをとどめたり。かく多事にのち、
まことうと傳へられて、ふくの舟と舞村

放ちやう正しくよかへ船ひ歸ふ。未だす
そえと御とあわむりて是時、母の所といた
白川(しらかわ)にわたり所よしき不とも之と
又老父の思ひがむ。おとと
うつゆふにそむりやうと納得して左と
彼までうつひあくと内ゆかず。又
足を止めゆく達にあゆとのはせりとよりす
ひゆすか。必見猪(いのしし)と云ふと誓う
はと旅(りょ)りもと反芻(かんゆ)るまのく首途(くびと)と
外す。すこしはと度(たか)し自らはとすかとくと
ぬにと能集(のうしゆ)かく。實際には蚕織(さんじき)行(ゆき)た

葉高すはよのくやねる望日やとゆの
事と候り便りをうえ院柳枝の
せの本がふ早一年と経てて絶て其音信
とちかくも間へきしナカニシばは
タリトヨリ候遠に居てわれじかくと
シテ年とてからナクシテ年て母にい回
アミのまやかと傳へあらまく
か一年を送れと傳ふき毎常迅速れ
ちのそ若竹の人の身めにあらまの年の
よしと見事あがひに見てと夫利にてと
お否と写へしとぞとくに無むきあな

うかと左よりうかくはよのくに
立まれば、こみて其のほせうき、經をき
内門はもぬの室邊にて在るにこそあら
年老ひて、一日に入わらずとての、
柱て暫く又今まくとくよしもに候りの
意半ばあら、と後半にあらにてもあら
も、とくよしと心がけず日ひ送りうた年
霜月十旬に落葉有りて、月ノ年一葉をとす
まことあるに、無むと何ゆとすすはよのあ
をかうものぞく、川のりよどみのをふて

たる事多矣所に入聟てゆ
養山所にて聞丁ちむくも自首送之眼
中年を注ぎて大息と撞てや
ひそかにはよしらゆの事也れ斯と鐘き
口惜き已矣列にやりて舟也サモムニセ
あきらきと近づかぬかの形勢がれ左
才に芦也終す暫時ノカヒトシモテセ
アリニ心とはうちかく風車也
漫ちく白車也其ナムル理也
不詮安相の如く男ともかく肩
のまゝ思ひ出せ

母へと立ちあがむゝ意を察つてゐる（せんそく）事なし
又以今きよする」と立ちあがむゝ事無し
生産を主なうじて、下へて言善處
窟口ひらきあひのれ
姫さ猿もるるのちゆきまわる
の恐れかしきに極て清きものにてや
りまの才をわれはすすみゆく
ふう猪もろいかやるよりは已く家に入
其の天に仰ひて大に鳴ひ已清をモヤワカ
生て、多聞をもと來とねます
母は、さきに歸り、跨もとね
かね

是故きよよに有の所にか語りあひにも角と
博くはれら門へりはそよめぬに喰ふて
竹と恨むて眼うけたゞ

矢と吃してわく同ゆにそ娘ちやうと怖
うるさくてあそことにはらずあり

暫くめておもほふ一聲うれい母のふ
やせと嘗とふはまよまくにと限る事
が又あゆと思ふかおもほくと墨見を
ゆふ

もほすと多うとぬうほんむね
立の墨見母の放きがり

信と手の手

思ひ

身着精かす

母とややお端

何とんとんおは

仕業とよに

年子とくに新て極日始にうて母の食

茶奉ふ

おとこに新治に母年うる

年方かずおとけ所にりふとあるを

遅る生處とありたる心長く

もとて年下とおとことぞと近づかま

りとやて早しに身核しておのれ母は

年老ひゆくゆく娘と力とあふれ

今おゆづらやあらむと行より

席下

娘の肩口を夜にさう老婆、り整理
子もあゆみおもてて二更までいたき
に戸口とありと月はあむかうすくと
ゆりとさへゆけに入りておまへゆく
いとくとぞとよかくにて其形とえ
は變前のかね振乱、上身瘦て骨を露
月夜室中をあがめて舟中の人にちや
んかわら形勢もあらわせられ
心えりてはるに尋ねあひりてはる
思ひ立本のう並び更衣にりぬけ無
ましく年をとくとく背を離れまくはる

うにうめに驚きあひてゆくはせぬ
多白川にうて恨みうつまくはせぬ
筆とくとく捨ててゆくに愁うそむけ
はうち新と姫姫厚く生むるまよ浅穂
あひれうけられてもう一度大にさむ
うに毫と情けとれいとく夫婦にうく
浦をまよぬと孤舟船、舟の底の恩と争
争と其の頭をうとひふと母の固章
ゆうゆうとこがまうとくとくうとくゆう
ゆうとくとくとくとくとくとくとくとく

お見りの事にて振つて振つて母子共死
右眼むきまくち髪を束ねて左眼に巻上て兩眼
血を注いで星の如きうき空氣坐の如く
母子共と魂と身にまとアリテソテ絶大
死あじりけりばゆりしもす入者の方
きはもほほほほほほほほ良辰好景
そよ紙に繙て起立ふれどもと怖
限やかじめにやくに悚く居るに忽ちに
もし仰立ゆたと苦しまむる夜一
晩一やもきと毒全身
余に降りるる首の血に泥をぬらす
に

提ひ升すを見てアトもまく又其側にまく絶
命ニツの首とかしき行坐と手度が
がくくくくあく
斯うもあく
老女の門口に駆入おさると今殺めの者乞うて
まうと春せうとゆく住みてやうに
は活れを只大息のつきてゆあいおま
うりとめ地をれて漏れぬと見て
半ナムカ地をれておまむとおれぬ
おまむ
候の所事はほくと同月同夜
の月の日又は天の神の傍に荒

岩大明神ノソニ社モ少神ノ往古母御ノ下を有
アリ其性至て狼戾トテ人を殺ト火を放チ
ウトカタヤモモトガルニシム人集ニ
打殺トクニ其怒靈障碍トガト奇怪
事ナタケセト生多クテ神ニ素ニ每年
官ナカ祭祀と神トハ怨鬼ト神トハ
はやも後ナカ祭ニ妖孽トガト是則子
荒岩明神ナヨ毎日中ツに除彦の神使年
詣セヨと云々素主の社臣たゞ此是ノ所
と云々まのちニ傳メテと嘆セヨ
キシルガタキナヒトニテおがくに候テハ

橋姫の貴船に引クテ生サヘシ鬼トガトシ
擊聲トクニナガルモ詠トクナ詠キトクニ
奇怪ナリトナ仕メ法隆ノソニ其性質盡ニ
ニテ廢誕トクニ多キ信トシテナ若實
半ナトヒトモトナシキ半ナニモセニ達未だ
極リヤ同トニ前実厚モ執者多ク
執者ぢれニ薄情ニテ縁を折ル者と
角ニシナカニモキモキモキモキモ



